東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅱ　**70**: 177－183，2019.

特別支援学校高等部の軽度知的障害生徒における メンタルヘルスに関する全国調査

―― 特別支援学校におけるスクールカウンセリングの検討 ――

仲野　栞[*1]・林　安紀子[*2]・橋本　創一[*2]・小林　正幸[*2]・尾高　邦生[*3]
李　受眞[*4]・杉岡　千宏[*4]・渕上　真裕美[*1]・三浦　巧也[*5]・渡邉　貴裕[*6]

教育実践研究支援センター

（2018年9月21日受理）

1．問題と目的

近年，小・中・高等学校の在籍者が一貫して減少傾向であることに反し，特別支援学校の在籍者は増加している。増加の主要因は知的障害特別支援学校の在籍者増加であり，中でも高等部在籍者の増加が大きな割合を占めていること，高等部では中・軽度の療育手帳を有する在籍者の割合が多く，軽度知的障害の生徒に対して何らかの教育的対応が迫られていることが指摘されている（国立特別支援教育総合研究所，2010）[1]。越野（2014）[2] も，現場では高等部の在籍生徒の「多様化」と実践上の「新しい」課題に直面していると述べている。

また，知的障害特別支援学校高等部は生徒指導上の課題として，「不登校」「不健全な異性との交遊」「精神症状」を多く挙げていることが明らかになっている（国立特別支援教育総合研究所，2012）[3]。加えて，小畑・武田（2017）[4] の研究から，知的障害特別支援学校高等部に在籍する軽度知的障害や発達障害のある生徒の約半数が情緒及び行動上の課題を抱えていることが分かっている。中でも，内的な怒りや葛藤を極端な反抗，暴力，家出，放浪，反社会的犯罪行為といった自己以外の対象に向けて表現する「外在化障害」より，怒りや葛藤を不安，気分の落ち込み，脅迫症状，対人恐怖，ひきこもりなどの形で自己を対象に向けて表現する「内在化障害」を示す人数の割合が多かったことが分かっている。これらのことから，特別支援学校高等部において，メンタルヘルスに不調を抱える軽度知的障害生徒は少なくないと考えられる。

公立の小・中・高等学校には心の専門家として，児童生徒の臨床心理に関して，高度に専門的な知識・経験を有する者としてスクールカウンセラー（以下SC）が配置されており，児童生徒へのアセスメント活動，児童生徒や保護者へのカウンセリング活動，学校内におけるチーム体制の支援など幅広い職務を担っている[5]。東京都教育委員会（2013）[6] の調査によると，SCと連携ができていると回答した養護教諭は全体の93.1%にのぼり，連携内容についても児童生徒・保護者への相談内容や教職員への専門的な助言等様々であった。このことから，通常の学校において，養護教諭とSCの連携は進んでいることが考えられる。

一方で，特別支援学校では，生徒のメンタルヘルスの課題については，教師や養護教諭，学校医等が対応していることが多い。下田（2016）[7] は，二次障害の予防として，高等部の軽度知的障害生徒を対象にストレスマネジメントとソーシャルスキルトレーニングを実施した。その結果，ストレスマネジメントやソーシャルスキルトレーニング等の取り組みが二次障害の予防に効果があることが明らかになったが，プログラムや支援内容によっては教師のカウンセリングスキル

＊1　東京学芸大学大学院 教育学研究科
＊2　東京学芸大学 教育実践研究支援センター
＊3　東京学芸大学附属特別支援学校
＊4　東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科
＊5　東京農工大学大学院 工学研究院
＊6　順天堂大学 スポーツ健康科学部

が求められることが分かっている。長谷高（2011）[8]は，特別支援学校における養護教諭の相談活動について示しており，特別支援学校では養護教諭が日常的に対応する健康相談活動に加え，月に1，2回健康相談を実施しており，相談内容に即した専門医が定期的に来校していると述べている。奥出（2011）[9]は，全国の附属特別支援学校と福井県内の特別支援学校計52校に健康相談の実施状況を調査した。20校の学校が学校医による健康相談を行っていることが明らかになり，うち17校は精神科が専門の学校医が相談を行っていることが分かっている。しかし，SCを配置している特別支援学校は少なく，増加している軽度知的障害生徒への対応に関する研究もまだまだ不十分である。

そこで，本研究では，特別支援学校高等部生徒のメンタルヘルスの不調と，そうした支援ニーズをもつ生徒・保護者対応の実態，特別支援学校におけるSCのニーズについて明らかにすることを目的とする。

2．方法

2．1　調査方法と調査対象

全国の高等部が配置されている知的障害特別支援学校714校の養護教諭を対象に質問紙調査を行った。返送があった312校（回収率43.7%）の養護教諭312名を分析対象とした。調査期間は2017年7月から8月までとした。宛先は学校長に依頼し，調査依頼書，質問紙，返信用封筒を送付した。調査依頼書にて，データは匿名化して使用するため個人情報は保護されること，調査結果は統計的に一括処理をして校名や特定の生徒，教師に関する情報は公開しないこと，データ分析後，質問紙は責任をもって破棄すること，調査結果は学会等で概略を公開する形で報告することを説明した。また，記入して返送した場合に研究参加に同意したとみなすことを明記し，回答した質問紙を厳封後に所定の場所に提出するよう求めた。

2．2　調査内容

知的障害特別支援学校高等部における心と行動の不調を抱える生徒の在籍状況，支援ニーズをもつ生徒・保護者への対応についての実態やSCの配置・連携について把握するための質問紙を作成した。質問紙の調査項目は（1）フェイスシート，（2）心と行動の不調を抱える生徒の在籍の有無，（3）支援ニーズのある生徒と保護者に相談・支援を求められる教職員等，（4）SCの配置の有無，（5）SCと連携していること・連携したいこと等である。

「心と行動の不調を抱える生徒」を「精神的な不調や行動面の問題があり，何らかの支援が必要と思われる生徒」と定義した。また，軽度知的障害の生徒について限定して回答をもとめ，「軽度知的障害」を「概ねIQ 50以上，または身の回りの生活面では自立している程度」と定義した。

2．2．1　フェイスシート

対象者の教員年数，現在の学校での在籍年数について記述で回答を求めた。

2．2．2　心と行動の不調を抱える生徒の在籍の有無

心と行動の不調（自傷，暴力・暴言，依存症，妄想・妄言，抑うつ症状，情緒不安定，心気的訴え，睡眠の問題，摂食障害，対人トラブル，いじめ，不登校・登校しぶり，非行，性の問題，愛着障害）を抱える生徒の在籍状況をそれぞれ尋ねた。「自傷」は「病院にて治療や指針などを受けているほどのもの」，「暴力・暴言」は「病院にて治療や指針などを受けているほどのもの」，「依存症」は「ゲーム機，スマホ・携帯電話，パソコン，タブレットの使用など」，「抑うつ症状」は「元気がない・無気力・行動の停止など」，「情緒不安定」は「激しく怒る・泣く，興奮など」，「心気的訴え」は「頭痛，腹痛，足のムズムズなど」，「睡眠の問題」は「眠れない，寝つきが悪いなど」，「摂食障害」は「拒食，過食，著しい偏食など」，「対人トラブル」は「他者とのけんか・言い争い・ストーカー行為など」，「いじめ」は「他者への攻撃的な言動，意図的な嫌がらせなど」，「不登校・登校しぶり」は「教室での集団参加の拒否」，「非行」は「盗み，不法侵入，器物損壊，支払いをせずに乗車・飲食など」，「性の問題」は「異性・性行為への執着，性に関する悩みなど」，「愛着障害」は「虐待・ネグレクト・体罰などの影響による問題行動」と各項目について説明を補足し，調査時点（2017年7月～8月）での在籍状況を「あり・なし」の2件法で回答を求めた。

2．2．3　支援ニーズをもつ生徒と保護者に相談・支援を求められる教職員等

支援ニーズのある生徒とその保護者がどの教職員（担任教師，学年主任・学部主事，管理職，養護教諭，SC　他）に相談や支援を求めるか「頻繁に求める（4）～全く求めない（0）」の5件法で回答を求めた。

２．２．４　SCの配置の有無

SCの配置の有無について，「配置されている・配置されていない・その他」の３件法で回答を求めた。

２．２．５　SCと連携していること・連携したいこと

SCが配置されている学校は実際にSCと連携をしている内容，SCが配置されていない学校，SCが配置された場合，どういった連携をしたいか自由記述で回答を求めた。

２．３　分析方法

選択式質問項目の回答については，単純集計とし，割合を算出した。自由記述式質問項目の回答については，KJ法を用いてカテゴリー分けを行った。

３．結果と考察

３．１　フェイスシート

対象者の平均教員年数は16.7年（SD = 11.3）であった。また，現在の学校での平均在籍年数は4.4年（SD = 3.8）であった。

３．２　心と行動の不調を抱える生徒の在籍の有無

心と行動の不調を抱える生徒の在籍の有無について尋ねた結果を表１に示す。

表１　心と行動の不調を抱える生徒の在籍の有無（n=312）

	在籍あり	在籍なし	無回答
情緒不安定	249 (79 80%)	57 (18 30%)	6 (1 90%)
不登校・登校しぶり	228 (73 10%)	74 (23 70%)	10 (3 20%)
心気的訴え	223 (71 50%)	78 (25 00%)	11 (3 50%)
性の問題	208 (66 70%)	95 (30 40%)	9 (2 90%)
睡眠の問題	200 (64 10%)	99 (31 70%)	13 (4 20%)
対人トラブル	194 (62 20%)	103 (33 00%)	15 (4 80%)
愛着障害	180 (57 70%)	123 (39 40%)	9 (2 90%)
抑うつ症状	165 (52 90%)	132 (42 30%)	15 (4 80%)
暴力・暴言	161 (51 60%)	141 (45 20%)	10 (3 20%)
自傷行為	133 (42 60%)	169 (54 20%)	10 (3 20%)
依存症	126 (40 40%)	174 (55 80%)	12 (3 80%)
妄想・妄言	125 (40 10%)	171 (54 80%)	16 (5 10%)
摂食障害	111 (35 60%)	189 (60 60%)	12 (3 80%)
非行	89 (28 50%)	209 (67 00%)	14 (4 50%)
いじめ	88 (28 20%)	206 (66 00%)	18 (5 80%)

ほとんどの項目において，該当する生徒が在籍していると回答した養護教諭が４割を超えており，様々な不調を抱えた生徒が高等部に在籍していることが明らかになった。小畑・武田（2017）[4] は，高等部に在籍する軽度知的障害や発達障害の生徒は反抗・暴力といった外在化障害よりも，ひきこもり，不安といった内在化障害をしめす割合が多いと指摘している。本調査においても，「情緒不安定」「不登校・登校しぶり」「心気的訴え」の在籍ありの割合が高く，「非行」「いじめ」の割合が低いことから，軽度知的障害の生徒は内在化障害を抱えることが多いことが示唆された。

３．３　支援ニーズをもつ生徒と保護者に相談・支援を求められる教職員等

支援ニーズをもつ生徒に相談・支援を求められる教職員等（n = 100）の回答の平均値は「担任教師」が3.6（SD = 0.73），「保護者」が2.9（SD = 1.09），「養護教諭」が2.9（SD = 0.77），「担任以外の教諭」が2.7（SD = 1.00），「学年主任・学部主事」が2.2（SD = 1.09），「スクールカウンセラー」が2.1（SD = 1.16），「特別支援コーディネーター」が1.5（SD = 1.15），「管理職」が1.3（SD = 0.98）であった。支援ニーズをもつ保護者に相談や支援を求められる教職員等（n = 69）の回答の平均値は「担任教師」が3.4（SD = 0.86），「学年主任・学部主事」が2.1（SD = 1.12），「スクールカウンセラー」が1.8（SD = 1.16），「担任以外の教諭」が1.8（SD = 1.02），「養護教諭」が1.8（SD = 0.89），「特別支援コーディネーター」が1.6（SD = 1.22），「校長・副校長・教頭」が1.6（SD = 1.06），「巡回相談員」が0.8（SD = 0.84）であった。

支援ニーズのある生徒や保護者に相談・支援を求められる教職員は担任教師が最も多く，生徒の相談・支援先は次いで養護教諭が多い。特別支援学校では生徒や保護者の心理的サポートの多くを担任教師や養護教諭が担っており，教師の負担が大きいことが考えられる。

３．４　SCの配置の有無

SCの配置の有無（n = 312）を尋ねたところ，「配置されている」が102校（32.7%），「配置されていない」が195校（62.5%），「その他」が15校（4.8%）であった。

学校保健統計調査（2017）によると，全国の公立高等学校の85.8%にSCが配置されており，通常の高等学校と比べると特別支援学校のSCの配置率は低いことが明らかになった。長谷高（2011）[8] や奥出（2011）[9]

から，特別支援学校では学校医による健康相談が行われており，精神科が専門の医師が定期的に来校していることが明らかになっているため，通常の学校におけるSCの役割を特別支援学校では医師が担っていることも考えられる。

３．５　SCと連携していること・連携したいこと

SCと連携をしている内容についてKJ法でカテゴリー分けをした結果を表２，SCと連携したい内容についてKJ法でカテゴリー分けをした結果を表３に表す。

表２　SCと連携している内容（n=81）

カテゴリー	サブカテゴリー
情報共有 41件(50.6%)	生徒に関する情報の共有　16件(19.8%) 全般的な情報共有　14件(17.3%) 相談での内容･生徒の様子の共有　9件(11.1%) 学校での対応･考えの共有　2件(2.5%)
連携なし 29件(35.8%)	他部署との連携　20件(24.7%) 養護教諭と接点なし　4件(4.9%) 対象生徒なし　3件(3.7%) 今後連携予定　2件(2.5%)
アドバイス 18件(22.2%)	対応についてのアドバイス　12件(14.5%) 専門的な見立て･コンサルテーション　6件(7.4%)
校内の支援体制の確立･充実 13件(16.0%)	ケース会議の実施　8件(9.9%) 教職員との面談　2件(2.5%) 研修の計画　2件(2.5%) 通信の発行　1件(1.2%)
連絡･調整 5件(6.2%)	日程の連絡･調整　5件(6.2%)
専門性を活かした対応 4件(4.9%)	カウンセリング　3件(3.7%) 心理的支援　1件(1.2%)
関係機関との連携 2件(2.5%)	医療機関との連携　1件(1.2%) 外部機関との連携　1件(1.2%)

表３　SCと連携したい内容（n＝166）

カテゴリー	サブカテゴリー
アドバイス 87件(52.4%)	対応についてのアドバイス　68件(41.0%) 専門的な見立て･コンサルテーション　19件(11.4%)
情報共有 59件(35.5%)	全般的な情報共有　46件(27.7%) 生徒に関する情報の共有　13件(7.8%)
専門性を活かした対応 51件(30.7%)	カウンセリング　37件(22.3%) 心理的支援　8件(4.8%) 障害に関する専門性　6件(3.6%)
校内の支援体制の確立･充実 48件(28.9%)	支援方法の検討　14件(8.4%) 支援の共通理解　12件(7.2%) 支援体制･環境の整備　12件(7.2%) 家庭への支援　4件(2.4%) ケース会議の実施　4件(2.4%) 研修の計画　2件(1.2%)
関係機関との連携 17件(10.2%)	医療機関との連携　14件(8.4%) 外部機関との連携　3件(1.8%)
連絡･調整 4件(2.4%)	日程の連絡･調整　4件(2.4%)
連携に消極的 4件(2.4%)	連携の必要なし　4件(2.4%)

SCの配置がある学校では，情報共有に関する記述が最も多かった。しかし，次いで他の部署と連携している，養護教諭との接点がないといった連携をしていないといった記述も多く，3割を超えていた。一方で，SCの配置がない学校では，対応についてのアドバイスや情報共有，SCの専門性を活かした対応等SCに期待をする記述が目立つ。SCの配置がない学校の期待と実際にSCが配置されている学校の現実のギャップが大きいことが明らかになった。

４．まとめ

特別支援学校高等部ではメンタルヘルスに不調を抱える軽度知的障害の生徒が在籍しており，養護教諭は様々な不調を抱える生徒の対応に追われていることが考えられる。また，担任教師も生徒や保護者の相談や支援に多く関わっていることが明らかになった。特別支援学校におけるSCの配置率は通常の学校に比べて低かったが，生徒のメンタルヘルスの実態や，教師の対応の負担を考慮すると，特別支援学校もSCの配置を進めるべきであろう。宮田・上村（2008）[10]は，特別支援学校高等部に在籍するアスペルガー障害生には傾聴，共感による一般的な相談活動を展開していくことが難しいことに注目し，継続的な相談活動の実施によってアスペルガー障害の特性に合わせた相談方法を検討した結果，感情ではなく，興味ある行動レベルに焦点を当てることが共同注意行動をとる頻度を増加させ，気持ちの共有につながったこと，話題を共有する際に視覚的な手掛かりが有効であったことなど特性を考慮した相談活動を行うことが重要であることが示唆された。本研究からも，特別支援学校の養護教諭はSCに障害に関する専門性を期待していることが分かっている。どのような専門性をもつSCを配置するのか，SCにどういった役割を担ってもらうか等を踏まえて，特別支援学校のSCの配置を進めていく必要があるだろう。

本研究の課題として，回収率が43.8%と低かったこと，回答者が養護教諭であるため，SCについての回答に関しては養護教諭が知っている範囲での回答であることが考えられる。今後は管理職等に学校教育相談体制の実際について調査をすることが必要であろう。

文　献

1）国立特別支援教育総合研究所：知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校に在籍する児童生徒の増加の実態と教育的対応に関する研究，平成21年度成果報告書，pp.1-146，2010

2） 越野和之：特別支援学校高等部をめぐる近年の諸問題，障害者問題研究，42（1），pp.2-9，2014
3） 国立特別支援教育総合研究所：特別支援学校（知的障害）高等部における軽度知的障害のある生徒に対する教育課程に関する研究―必要性の高い指導内容の検討―，平成22～23年度研究成果報告書，pp.1-207，2012
4） 小畑伸五・武田鉄郎：知的障害特別支援学校高等部の軽度知的障害教育課程を履修する生徒の情緒および行動上の課題に関する研究，特殊教育学研究，55（2），pp.85-94，2017
5） 文部科学省：生徒指導提要，pp.126-128，2010
6） 東京都教育委員会：平成25年度教育研究員研究報告書，pp.7-11，2013
7） 下田渚・吉田ゆり・内野成美：特別支援学校高等部（知的障害）における二次障害への教育的対応―ストレスマネジメント，SSTを中心に―，長崎大学教育学部教育実践総合センター紀要，15，pp.259-269，2016
8） 長谷高あけみ：特別支援学校における養護教諭による相談活動，鳥取大学教育研究論集，1，pp.103-108，2011
9） 奥出しのぶ：特別支援学校における学校医による健康相談―養護教諭の中核的な役割を生かした「からだとこころの教室」の取り組み，福井大学教育実践研究，35，pp.235-241，2010
10） 宮田恭子・上村惠津子：二次障害のあるアスペルガー障害生が自己理解を深めるための支援―本人の気持ちに寄り添う相談を通して―，信州大学教育学部附属教育実践総合支援センター紀要　教育実践研究，9，pp.51-60，2008

特別支援学校高等部の軽度知的障害生徒における メンタルヘルスに関する全国調査

―― 特別支援学校におけるスクールカウンセリングの検討 ――

Countrywide survey on mental health of students with mild intellectual disabilities in upper-secondary school sections of special needs school:

Examination of school counseling at special needs school

仲野　栞*[1]・林　安紀子*[2]・橋本　創一*[2]・小林　正幸*[2]・尾高　邦生*[3]
李　受眞*[4]・杉岡　千宏*[4]・渕上　真裕美*[1]・三浦　巧也*[5]・渡邉　貴裕*[6]

Shiori NAKANO, Akiko HAYASHI, Soichi HASHIMOTO, Masayuki KOBAYASHI, Kunio ODAKA, Sujin LEE, Chihiro SUGIOKA, Mayumi FUCHIGAMI, Takuya MIURA and Takahiro WATANABE

教育実践研究支援センター

Abstract

This study was designed to clarify the mental health problem of students in upper-secondary sections of special support schools, as well as the support needs of school counselors (SCs) in these schools. We conducted a questionnaire survey with school nurses in upper-secondary sections of special needs schools as participants. We requested the participants to provide information about students with mental health problems, and the placement of SCs. Results indicated that school nurses in special needs schools were dealing with students having various mental health problems. Also, results indicated that homeroom teachers were responsible for providing the most amount of support for students and parents because special needs schools had few SCs. it is suggested that the number of SCs be increased because of their expertise that complement the realities of the students' conditions and the burden on teachers.

Keywords: Mild intellectual disability, Mental health, School nurse, School counselor

Center for the Research and Support of Education Practice, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨： 本研究の目的は，特別支援学校高等部生徒のメンタルヘルスの不調と，支援ニーズをもつ生徒・保護者対応の実態，特別支援学校におけるスクールカウンセラー（以下SC）の支援ニーズについて明らかにする

*1 Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University
*2 Center for the Research and Support of Education Practice, Tokyo Gakugei University
*3 Special Needs School Attend to Tokyo Gakugei University
*4 The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University
*5 Tokyo University of Agriculture and Technology
*6 Juntendo University

ことである。高等部のある特別支援学校の養護教諭を対象に質問紙調査を行い，生徒のメンタルヘルスの不調やSCの配置についての回答を求めた。

その結果，特別支援学校の養護教諭は様々なメンタルヘルスの不調を抱える生徒の対応をしていることが示唆された。また，生徒や保護者の相談・支援の多くを担任教師が担っていることが明らかになった。特別支援学校はSCの配置率が低いが，生徒の実態や教師の負担から，専門性等を考慮した上でSCの配置を進めていくべきであろう。

キーワード: 軽度知的障害，メンタルヘルス，養護教諭，スクールカウンセラー